

『私に影響を与えた1冊』

花が華であるために

「社会的な死（差別）は、本当の死と違って生還できる。その方法は一つしかない。こつこつと少しずつ社会性を取り戻していくんだ。他の人間との繋がりの糸を、一本ずつ増やしていくしかない。君を中心にした蜘蛛の巣のような繋がりが出来れば、誰も君を無視できなくなる。」

この言葉は、東野圭吾氏の小説「手紙」で犯罪者家族に向かい語られた言葉である。

両親を亡くし親代わりに弟の面倒をみてきた兄が、弟の大学進学費を得るために強盗殺人を犯し無期懲役の判決を受ける。弟は大学進学をあきらめまじめに働くが「殺人者の家族」とされ自分だけでなく妻や娘も社会から差別を受ける……。そして、弟は愛する家族を守るためについに兄を「捨てる」決心をする。それは、犯罪者家族であることを「捨てる」決心でもある。

しかし、兄の六年間に渡る被害者遺族への「謝罪の手紙」に触れることになる。償いの心に触れた弟は兄に向かってこう語る。

「バカだけど、でも、たったひとりの兄貴だから……。しょうがない」と。

今まで社会的な死という苦しみ受けてきた弟が「赦す」と言うのではなく「しょうがない」という表現に兄への想い、兄弟の絆が感じられる。

このように日本では、被害者家族はもちろんのこと犯罪者家族も苦しまなければならない社会なのである。また、そうなれば今までの生活ができなくなるのが現実である。

この社会性は、アジア全般にみられるが欧米では犯罪者家族が差別に苦しむことはない。例えばアメリカでは悪いのは犯人であって家族、親戚は全く何の関係もないと認識される。もちろん、謝罪などはしない。欧米で犯罪者になれば家族との別れである。

この違いは、アジアの集団主義と欧米の個人主義の違いのようである。特に日本では江戸時代半ばまで連帯責任制度があり犯罪が行われた場合には家族までが罰せられた。

連帯責任制度の目的は、犯罪を犯さないという抑止力のためである。その伝統が今に至るまで日本の風土に色濃く残っている。だから、犯罪者家族は苦しまなければならないのである。

しかし、今の時代には連帯責任制度は無く犯罪者家族に何の責任も無いのは明らかである。それでも就職、結婚の差別を受ける。家族にとって日本は嫌な社会に思うことだろう。それに、日本では犯罪者家族支援の団体は限られている。集団主義か個人主義のどちらが良いのだろうか。

この小説「手紙」は、映画化され千葉刑務所で初犯の受刑者七八〇人が鑑賞した。ある受刑者の感想がこう綴られていた。

「無期懲役で服役の身である私には兄がいます。兄にも家族があり、どんなに苦労したかを考えさせられました。面会のときに見せた兄の涙を思い、見放さないでいてくれたことに感謝します。」と。

このように犯罪者がいつまでも家族の絆を信じていること。また、兄の涙が語るように犯罪者になれば負担は

自分だけでなく家族にもかかることが集団主義なのである。

日本では、罪を犯せば家族は社会から殺される。それは目を背けてはいけない事実である。犯罪者家族になるということは被害者家族の始まりでもある。

でも、それは東野圭吾氏が語るように本当の死ではない。犯罪者家族に対して「赦す」という許容範囲ががとでも狭くなりつつある社会だからこそ家族が一緒になることが社会的な死から生還する近道なのかもしれない。

勿論、犯罪者家族を差別することは認められていない。しかし、集団主義により差別と身近な環境にいることはわかる。

でも、それは人とも身近になっていることを忘れてはいけない。それに差別からは赦しは生まれない。

結論、集団主義と個人主義の違いは人との距離である。日本では、人との距離が近い。でも、それによって自然に差別加害者を生むのではなく絆に守られた社会ができることを東野圭吾氏は望んでいるように思う。また、どのような形であれ相手を思いやり人から離れることのない環境を望んでいることだろう。そして、いつの日か「犯罪者家族」という言葉が語られない日がくるだろう。

私は、東野圭吾氏の小説「手紙」により誰もが踏み込みたくない人権問題に触れることができた。しかし、その答えは「キズナ」が解決してくれた。私は、絆を語る日本が好きである。

花が華であるために私たちは皆の傍から離れてはいけないのである。